

勇気と友情の物語 世界と交流した近代日本

エルトゥールル号

●日本人救援機を出したトルコ

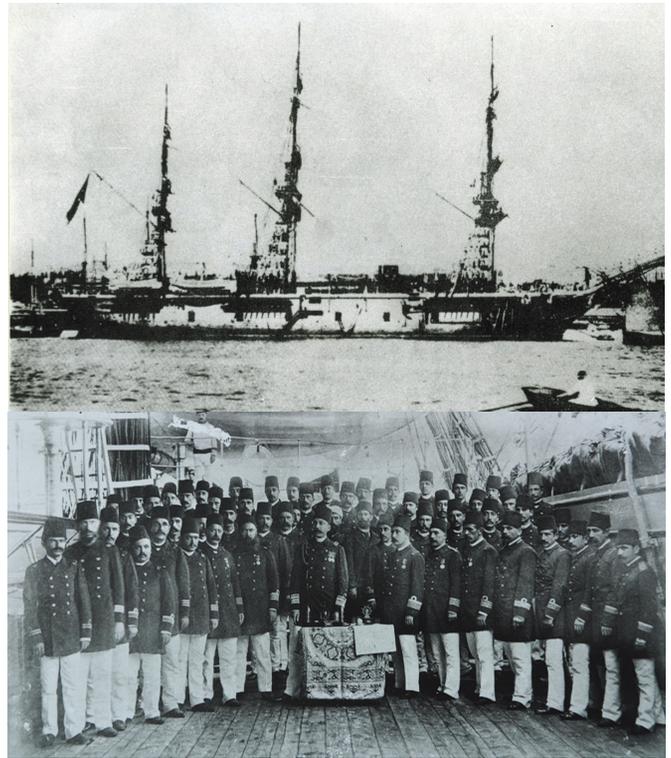
1985（昭和60）年3月、イラン・イラク戦争のさなかのことです。イラクのフセイン大統領は48時間以降、イラン上空のすべての飛行機を無差別に撃ち落とすと発表しました。イランにいた他の国の人々は、自国から派遣された特別機で次々と脱出しましたが、憲法の制約もあり日本人とその家族だけはテヘラン空港に取り残されてしまいました。

時間切れ直前となったとき、2機の飛行機が突然やってきました。日本人救出のための外国の特別機です。215人の日本人は、警告期限のわずか2時間前に無事脱出することができました。

飛行機はイランの隣国、トルコ政府が派遣した民間の救援機でした。なぜトルコが日本人のために危険な空港に飛行機を派遣したのかは、その95年も前に起きたある事件に対する日本人への恩返しのためでした。

●トルコの軍艦が遭難

1890（明治23）年6月、トルコ（オスマン帝国）の軍艦エルトゥールル号は、650人の親善使節団を乗せて横浜港に到着しました。日本で初めて帝国議会が開かれた年で、同じように近代国家をめざしていたトルコは日本との友好を強く望んでいました。1年あまりの苦難の航海の末、やってきた使節団は明治天皇を



トルコ軍艦エルトゥールル号（上）と親善使節団（下）この船は、帆と蒸気機関を備えた蒸気帆船でした。（和歌山県・トルコ記念館蔵）

はじめ各界の熱烈な歓迎を受け、9月、帰国の途につきました。

ところが神戸に向かう途中、エルトゥールル号は台風に遭い、和歌山県串本町大島の檜野崎沖で難破し沈没してしまいました。587人が犠牲となる大惨事で、深夜、岸に打ち上げられた人々は、灯台にたどりつき助けを求めました。灯台守は三日月と星の国旗からトルコ人であることを知りました。

●島民の献身的な救助と介護

大島の400戸の島民たちは気の毒な異国の遭難者を

助けようと献身的にはたりました。男たちは沖に船を出して遭難者を探し、冷たくなりかけた負傷者には裸になって自分の体温で体をあたため、命の灯を蘇らせました。女たちは負傷者の介護や食事の世話に不眠不休で奔走しました。島民は非常食用の鶏、持てるもののすべてを提供しました。

事件が新聞で報じられると、日本中から今のお金で約3000万円に（米価換算で）相当する義援金が寄せられました。生存者69人は、神戸の病院で治療を受け、元気を回復して日本の軍艦「比叡」「金剛」でトルコに帰国しました。

明治天皇は島民の立派な行いを称賛し、救援にかかった費用を申しでることを求めましたが、島民たちは「当たり前のことをしてだけ」と言って、これをきっぱり断りました。明治の日本人の心意気を示すことでした。しかしトルコの人々は長く日本人への感謝を忘れず、それが95年後のイランでの日本人救援機派遣につながったのです。今でも申本町とトルコとの間では心暖まる交流が続いています。

台湾に巨大ダム

●緑の大地を開いた八田與一

近代日本には世界から感謝された多くの日本人がいました。その一人が日本統治下の台湾でダムを建設した八田與一（1886～1942）です。

台湾の嘉南平野は、台湾の全耕地面積の6分の1を占める広さですが、もとは雨期の洪水と乾期の水不足に悩まされる不毛の土地でした。石川県に生まれ、東京帝国大学で土木技術を学んだ後、台湾総督府につとめた八田は、この問題を解決するため、平野の上流の

川をせきとめ巨大なダムをつくる計画を立案しました。ダムから安定して水を供給するためです。

1920（大正9）年に始まった工事は難航を極めました。ある日、工事現場で石油ガスが爆発し、50人あまりが亡くなりました。この事故で八田は完成をあきらめかけましたが、台湾の人たちはこう言って逆に八田を励ましました。「事故はあんたのせいじゃない。おれたちのために、台湾のために、みんな命がけで働いているのだ」。

1930（昭和5）年にダムは完成し、嘉南平野は緑の大地に生まれ変わりました。アメリカの土木学会は「八田ダム」と名付け、世界にその偉業を紹介しました。台湾では今でも八田の命日に慰霊祭を行っています。また、東日本大震災で、世界から寄せられた義援金のうち、もっとも多額だったのは台湾からのものですが、その背景には台湾のために命がけで働いた八田らの多くの日本人がいたからでした。



八田與一の像 ダムの水面を見つめている。